



## 「わかった」から「できた」へ

校長 青山龍三

最近の国際学力比較調査で日本の子どもの家庭学習時間が最低であることが明らかにされました。あわせて、家庭でのテレビを視る時間・ゲームをする時間は逆に世界最高でした。その結果、家庭学習の大切さが見直され、宿題について様々な意見が交わされるようになりました。

本校でも宿題がいろいろな形で出されています。1単位時間（小学校は45分）のうちに教師は工夫を凝らし、子どもたちが「わかった」と言えるようにしています。しかし、私も経験があるのですが、この「わかった」が結構くせ者です。「わかった」から「できる」と思い込んでしまうのです。スポーツを例にとるとわかりやすいので例としてあげますと、



野球ではグローブでの捕球の仕方や送球の仕方、バットの出し方など説明や指導を受けて「わかる」のですが、すぐ「できる」ようにはなりません。バスケットのフォーメーションも指導を受け「わかる」のですが、すぐにはできません。だから、頭で「わかった」ことを懸命に繰り返し練習し、さらに努力を重ねることで、やっと「できる」ようになるのです。

勉強も同じです。授業で「わかった」ことが「できる」ようになるためには、努力と練習が必要です。本来ならば授業中に「できる」所まで達成できれば良いのですが、反復練習の時間を毎時間確保することは、時間的に難しく、練習（ドリル）は宿題になることが多いのです。したがって、宿題に出されるドリルは、「わかった」ことを「できる」まで引き上げるために大切なものなのです。

昔から日本には「10分×学年」という宿題文化があります。私も小さかったころ先生から言われたことを覚えていますし、きっと今でも使っている教師もあると思います。1年生は「10分×1学年＝10分」、6年生は「10分×6学年＝60分」を目安に宿題を出すことが多いと思います。



江戸中期の儒学者で政治家である新井白石には「一粒の米」という逸話があります。幼少のころの白石を父が戒めてこう言ったそうです。「1粒だけ米びつから米を取っても減ったとはわからない。逆に1粒入れても増えたかどうか、わからない。しかし、1年、2年続けると増減がわかってくる。1日勉強したから利口になるわけではない。1日怠けたから愚かになるのでもない。しかし、1年、2年続ければ、必ず変わってくる」と。

一方、難しいのは情操面の教育です。情操教育は「教える」というよりは、「感じさせる」ことが大切です。『情操豊かな子に育ててほしい』という願いは、例えば自分が夕焼けを美しい、と感じたときに子どもを呼んで、『きれいやねえ。』とひとこと言っても、満天の星空を見せてもよいでしょう。また、本と一緒に読みともに笑ったり、涙してもよいと思います。このような経験をして育った子は深く感動したり、人の気持ちが感じられたり、美しいものに心を奪われたりして、きっと豊かに生きて行けると思います。



私たちも、保護者の皆さんも、子どもの世話をしているのではありません。育てているのです。願いを持って、適切な手段をとって、ともに育てたい姿に育てていきましょう。